

クモマツマキチョウの飼育法

2006. 5. 27

仁平 勲



始めに

高山蝶と呼ばれるものたちはマニアにとっては垂涎的であるが、一部のものは成虫自体を得るのも難しいほど種々な制約がある。しかし、チャンスがあれば美しい完全な個体を数多く得たいという願望はつきてやまない。それにはなんとしても飼育が一番であろう。だがそれとて平地では高山とは環境がことなり簡単にはゆかない、そのなかでもクモマツマキチョウは比較的飼育が容易で美しい姿とともに人気が高い、皆さん方も色々工夫してチャレンジした方も多と思われるが、今回はそのクモマツマキチョウの私なりの飼育法をのべてみたい、なにかの参考になれば幸いである。

卵から3令まで

食草はアブラナ科の種が主でほぼ何の種類でも食す（近年、外来種の見慣れないものも多いがそれらもほとんど食う、ただ、ペンペン草だけは硬すぎるのか、種の形状がよくないのか弱令が食いつけず不適）また、畑の近くにあるものは栽培ものと一緒に消毒されているものがあるので気をつけてください。

卵は野外採取でも母蝶採卵（袋かけ等で簡単に生む…ツマキチョウの方が数倍気難しい）のものでも同様に扱うが、野外採取の

ものは1花穂に1卵ずつ産付が多いが強制採卵の場合は生みやすいところに集中的に密生して生むので、安全かみそり等で切り離してポンドで別な花穂に1卵ずつ付けなおす必要がある（又あまり高温での採卵は無精卵が多くなるので要注意）

これは3令まで非常に共食いが激しいからである。

私の場合この一卵ずつの花穂を10～15cmくらいに揃え、ヤクルトのプラスチック瓶？に水をいれ、アルミホイルを上にかぶせてお互いが触れあわないような位置の3ヶ所に小さい穴をあけそこへ1本ずつ差す。幼虫は手近の種（時に花穂や葉も）食し3令後半くらいまであまり動き回らないので多くの食草は必要ないが、定期的に見て食われて種が少なくなってきたら、適宜適当な量を差し加えてゆく（図参照…左端に3令幼虫が見える）



4 令から蛹まで

4 令になると共食いはしませんので牛乳瓶や花瓶に長く切ったアブラナ科を纏めて差し10~15 頭くらいの幼虫をたけて飼う、終令になったら下図のような手作りのケース？をかぶせる（このケースは模型用の1cm角材を切り、ボンドでつけてゴースを張り合わせたものである…これも大中小と3 個あると便利です）瓶の中の水切れと餌切れに注意してください。

幼虫は食草の茎や木材などで順次蛹になってゆきます。



蛹は茎ごと適当な長さに切り、木材でなったものはそっとはがします（慌てて蛹がやわらかいうちに触るとつぶしますので、必ず茶色くなって硬くなったことを確認してください）蛹はかなり丈夫なので後は部屋のなかで来春までころがし放りっぱなしで平気です。ただしあくまで風通しの良い日陰におくことを忘れずに…

蛹は稀に茶色く変身せず緑色のままのものもあります。翌春羽化せず2 年越しのものもあります。また、飼育の場合蛹の上に蛹の親亀子亀状態のものもあります。その場合きちんと丁寧に糸を取り除いて1 頭ずつにしてください（糸が残っていると羽化時の支障になりますので）黒く変わらない限

り生きておりますのでご安心ください。

近年、冷蔵庫を利用し秋口に羽化させたり、交配させて11 月ころもう1 回蛹を作る（畑などに秋ロイヌガラシが一杯あるそうです）方などもいるようです。皆様も色々チャレンジしてみてください。

以上は5 月一杯までの卵からの飼育法です。6 月に入ってから卵からの飼育はやはり高山蝶の仲間ですので温度と湿度の関係で飼育は難しくなります。クーラーをつけたり、保冷材を使用しトロ箱で飼ったりそれなりの温度調節が必要です。1 日3 回くらい霧吹きで水をかけるのも一時的な効果があります。

高山蝶の飼育には密閉容器はまず不可と思ったほうがよいでしょう。